後の回復は犬の方がやや速かな様である。

③ 頸動脈内温水注入—左頸動脈内に 55°~60°C 生理的食塩水を家兎は 5 cc 7 秒間、犬は 20 cc, 15 秒間で注入したが家兎に於ては犬に比して肝温の著明な上昇を見た。

④ 頸動脈内冷水注入—4°~5°C の生理的食塩水を家兎は 5 cc 5 秒間、犬は 20 cc 15 秒間にて注入したが家兎に比し犬の変化が著明である。

⑤ アドレナリン注射—1000 倍アドレナリン液対 kg0.1 cc を家兎は耳静脈犬は股静脈内に注射したが両者間に大なる差異は認められぬが犬の方が上昇持続時間がやや長い様である。

§ 考 察

以上の実験より健康成熟家兎及び健康成熟犬を比較するに、これら場合に両者は体温調節の面に於て異なるものの如くである。

猶種々なる種族に於ける種々なる Stress に対する温調節の差異に就ての成績は今後の機会に譲る。

〔千葉大学医学部田坂内科教室〕

京都の屋内鼠の研究(第2報)

Sato, A., Akaza, S., Watanabe, K., Urabe, A. and Kawamoto, S.: Studies on the houserats in Kyoto. (Report II)

佐藤淳夫・赤座奨・渡辺清・ト部昭・川本脩二

昭和 25 年 11 月の近畿地方例会に引続いて、京都市中京区内の一般家庭に於て捕獲せる鼠を中央保健所にて買上げたものを用いて調査を行つた。昭和 25 年 11 月 16 日より 26 年 3 月 20 日迄に入手せる総数 2394 頭に付き種別、及び身体計測(頭胴長、体重、尾長)を行い、更にその一部につき内部寄生虫の検索を行つた。

(1) 種別は第 1 表の如し、仔鼠とは頭胴長 10 cm 以下を意味する。

(2) 頭胴長、体重、尾長に関して、その分布曲線より、2 峯性の分布を示すものの如し。

(3) 所謂混合型即ち耳及び外型は *R. nor.* に類し尾長は頭胴長よりも長きもの、及び逆に耳と外型は *R. ratus* に類するも、尾長は頭胴長よりも短きものの存在を認む。(第 1 表)、酒骨及び固定標本による検索の結果は今後にまつ。

(4) 内部寄生虫は第 2 表の如し。

第 1 表

総数 2594 頭 (自昭和 25 年 11 月 16 日 至 " 26 年 3 月 20 日)					
<i>R. r. a</i>	親	♂ ♀	387(14.9%) 518(20.0%)	905(34.9%)	1025 (39.5%)
	仔	♂ ♀	42(1.6%) 78(3.6%)	120(4.6%)	2372
<i>R. n</i>	親	♂ ♀	58(22.1%) 646(24.9%)	1229(47.0%)	1347 (51.5%)
	仔	♂ ♀	60(2.3%) 58(2.2%)	118(4.5%)	(91.0%)
混合型				29(1.1%)	
不能	親		155(6.0%)		
	仔		38(1.1%)	193(7.1%)	

第 2 表

	<i>R.r.a.</i> 18頭	<i>R.n.</i> 62頭
<i>Capillaria bacillata</i>	0	2(3.3%)
<i>Capillaria hepatica</i>	13(72.1%)	49(79.0%)
<i>Trichosomoides crassicauda</i>	1(5.1%)	34(54.7%)
<i>Ganguleterakis spumosa</i>	0	29(46.5%)
<i>Aspiculuris tetraptera</i>	1(5.1%)	
<i>Syphacia muris</i>	1(5.1%)	1(5.1%)
<i>Cysticercus fasciolaris</i>	15(83.3%)	47(75.8%)
<i>Hymenolepis diminuta</i>	0	5(8.1%)
<i>Moniliformis dubius</i>	0	1(1.6%)
<i>Trypanosoma lewisi</i>	1(5.1%)	1(1.6%)

〔京都府立医大医動物学教室〕

札幌市の住家性ネズミ類の性比について

Ohta, Y.: The sex ratio of house rats of the city of Sapporo.

太田 嘉四 夫

札幌市において最近の 3 年間に、主に積雪期の半年間に採集されたクマネズミ、(*Rattus rattus rattus*) (*R. rattus alexandrinus*) ドブネズミ (*Rattus norvegicus norvegicus*) 及びアジアハツカネズミ (*Mus molossinus*) の性比をしらべた。11 月から 4 月まで 月別に性比の変化をみると、クマネズミは 3 多とも、殆んど月 100 : 100 とみてよい。ドブネズミは 8 の方が多いとみられ

る月が多く出たのが2冬で、1冬は、変化がみとめられない。アジアハツカネズミは、2冬だけしらべたがいずれも月別には100:100とみてよい。

しかし、6カ月間を合計したものでは、クマネズミでは1冬だけ♀の方が多いいえ。ドブネズミは3冬とも♂の方が多いとみとめられ、アジアハツカネズミは、1冬だけ♂の方が多いとみとめられる。

いずれの種類も、積雪期半年間の季節的变化は認められない。夏季の採集で得た個体数は少なく、冬の材料と同時に論ずるのには不適當である。

3年間の総計についてみるとクマネズミは♀が少く、ドブネズミ及びアジアハツカネズミは♂が多い。これは、♀♂の少しずつの差が累積された結果であるが、この少しずつの差はネズミ類の生態によつて生じたものと考え。冬の間もドブネズミ、ハツカネズミは相当数屋外に営巣していると思われるが、駆除に際しては哺乳中の♀などが行動の制限によつてワナや毒餌にかかり難いのではないか。これに反しクマネズミは一年を通じて家内にあるためにむしろ哺乳中の♀の方がワナや毒餌にかかり易いのではないかと思う。〔北大農業動物〕

神戸市に於ける鼠類の研究

Miyata, I.: Studies on rats of the city of Kobe.

宮田 彝 徳

神戸市に於て捕獲せる鼠類に就て、それらの生態分布などに関する調査を行い、且つそれら鼠類の外部寄生虫、特に蚤類につき、又内部寄生蠕虫類に就ても検索し得た成績があるので、併せてそれら各事項の概要について報告する。〔神戸市衛生研究所〕

大阪市内における棲息鼠の様相について

Tanaka, H. and Ikuzawa, M.: On the studies of the rats in Osaka City.

田中 英雄 生澤 萬壽夫

大阪市内の鼠族の様相については昭和25年1月から6月迄は *R. n. norvegicus* が優勢を示したがこれは食物等による一時的移動の関係と思われる。その後 *R. r. alexandrinus* が漸次優勢を示し本調査によるジェン台風

以後は明らかに本種が優勢を示している。

本調査による材料は昭和25年10月16日から昭和26年2月28日迄の間に大阪市内の各区で捕鼠籠によつて捕えられた15,501頭の鼠類である。

全捕獲鼠の種類は *R. r. alexandrinus*, *R. r. rattus*, *R. n. norvegicus*, *R. r. hibernicus*, *R. n. nor. x.*, *R. n. albinus* 等で、その百分比は *R. r. alex.* 76.1%, *R. n. nor.* 23.7%, *R. n. hiber.* 0.2%, *R. r. rattus* 0.01% で *R. r. alex.* が高率を占めている。更に種類の点から見ると、昭和25年1月から6月迄 *R. n. nor.* の多かつた西淀川区此花区の臨港地域は台風以後 *R. n. nor.* が急激に減少し *R. r. alex.* 西淀川区90.1%此花区78.7%に対し *R. n. nor.* は西淀川9.9%, 此花20.4%に過ぎない。これは台風による *R. n. nor.* の移動が考えられる。即ち周辺地区の西区、南区では *R. n. nor.* は夫々34.5%, 41.0%と比較的高率を示した。*R. n. hiber.* は昭和25年2月臨港地区で始めて捕えられたが、西成、南区等でも発見され市内中心部にも繁殖しつつあることを知るのである。

鼠類の性比については本調査期間の比較的寒冷時期では、*R. alexan.*, *R. norve.* 共雌が多く、全体的に見ると雌59.1%に対し、雄40.9%であつた。次に鼠族の外部寄生虫について見ると、*R. alex.* では *P. spinulosus* 34.46%, *L. bacoti* 26.7%, *D. caecigena* 11.2%, *Laelaptinae* 9.76%, *C. fasciatus* 9.25%, *R. nor.* では *Laelaptinae* 31.97%, *P. spi.* 27.64%, *L. bacoti* 26.69%, *C. fasc.* 6.87%等で、*R. alex.* では冬期寒冷期は鼠類が多く、*R. nor.* では鼠蟻が最も多いことを示している。尚夏季に見られた *X. cheopis* は全く見られなかつた。〔大阪市立医大〕

砂蚤の發育史について(予報1)

Tanaka, H. and Ikuzawa, M.: The life cycle of the sand-flea.

田中 英雄 生澤 萬壽夫

49年本邦に始めて見られたネズミスナノミ(*Dermaphila caecigena* J. & R.) は50年4月森下博士等によつて発表されたのであるが、本種の生態、習性、發育、被害状況等については未だ発表された文献等がないので、現在迄判明した調査実験について報告する。